

□ 特集 □

人工呼吸に関連する用語の標準化—現状と問題点 看護師の立場から

丸山 美津子*

1. はじめに

医療機関での安全管理体制が強化される中で、安全で質の高い医療を提供するためにチーム医療の整備が急速に進んでいる。チーム医療の柱となるのはコミュニケーションであり、多職種間での情報共有と正確な情報伝達が要であることは言うまでもない。

例えば呼吸ケアサポートチームは、医師、看護師、臨床工学技士、理学療法士、歯科医師、歯科衛生士等々で構成され、これら多くの職種がそれぞれの専門的知識・技術を提供し、相互に連携を図りながら最良の医療提供を目指して活動している。その活動の根拠となるのが患者情報であり、その情報をいかに共有するか、正確に把握するかが重要である。チームの中でも看護師が最も多くの患者情報を持ち得る職種であり、他のメンバーは看護記録を通して患者の情報を取得し、共有する機会が多い。したがって看護記録は誰にでもわかる、正確に伝わる記録であることが求められる。そのためには用語の標準化・統一が重要課題である。特に、看護界における用語の統一は最重要課題であり、看護学の確立のため、質向上のために看護協会をはじめ、各学会で取り組まれているのが現状である。看護界における用語統一に向けてのこれまでの足跡と現状を文献をもとに、とりわけ電子カルテ導入における用語統一の必要性和呼吸ケアサポートチーム活動を推進するための用語統一の必要性について述べる。

2. 看護における用語統一について

1) 看護診断とは

私たち看護師は、一連の看護過程 (nursing process) を通して患者さんに看護をシステムティックに提供して

いる。看護過程は、アセスメント・問題の明確化・目標設定・計画・実施・評価からなるものである (図1)。

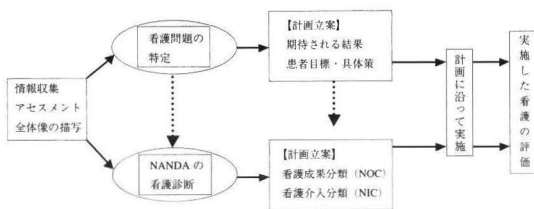


図1 看護過程の展開

文献¹²⁾より一部改変

しかし表現については各看護師に任せられ、特に看護問題は極端にいえば同じ看護を必要とする現象 (看護問題) でも、A看護師とB看護師では表現が異なるという現象が生じていた。これは我が国だけではなく世界的な看護界の問題でもあった。この看護問題の表現と病院の病歴自動化の風を受けて、1973年に第1回全米看護診断分類会議が開催され、それ以来本格的な看護診断用語の開発が始まった。現在では北米看護診断協会 (North American Nursing Diagnosis: NANDA) となり看護診断名 (ND: Nursing Diagnosis) 開発の公式団体として、診断名の妥当性の検証をはじめ、診断自体の開発を進めている。NANDAの看護診断は「実在または潜在する健康問題/生活過程に対する個人・家族、および地域の反応についての臨床判断である。それは看護師が責務をとる結果の達成に対して治療の根拠を明確に提供するものである。」と定義されている。さらにはアイオワ大学研究チームが開発している、看護師が実施する介入の包括的標準化を目指した看護介入分類 (NIC: Nursing Intervention Classification)、看護介入の結果を評価するために用いる患者成果を包括的に標準化した看護成果分類 (NOC: Nursing Outcome Classification) との連携を含め検討が進められている。

*兵庫医科大学病院 看護部

我が国においても日本看護診断学会が中心となって早くから電子カルテ、IT 化を見据えての討議を重ね、用語統一に向けての活動が行われている。現在、電子化されている看護記録としては基礎情報（個人）、問題リスト、看護計画、経過記録フローシート、看護サマリーなどがある。

2004 年に日本看護診断学会用語検討委員会が実施した看護診断に関連する電子カルテの実態調査（全国 400 床以上の 734 病院を対象）では、平成 20 年までに導入予定の施設を含め 192 施設で、その 61.6%(77 施設)が NANDA の看護診断名を導入しており、定着の様相を呈していたとの結果であった¹⁾。今後電子カルテ導入が進む中で、看護部門が NANDA-NOC-NIC を導入する施設も増加していくのではないかと考えられる。NNN (NANDA-NOC-NIC) の例を表 1 に示した。「非効果的呼吸パターン」の診断名に対するアウトカムが気道開通、換気などで、介入は「主要介入」と「推奨介入」「随意介入」に分類されている²⁾。この中から必要項目を選択して、それぞれの項目にリストアップされている行動を実践していく。この他にも、誤嚥のコントロール、ガス交換などがありそれぞれに同じように介入が網羅

されている。現在 NIC には 486 の介入項目があり、行動は 12000 以上が紹介されている³⁾。

NANDA-NOC-NIC の普及が予測される一方で、看護診断カテゴリーの使用にあたっては、訳語の問題や文化的な背景の違いで困難さが指摘されているのも事実である。この看護診断カテゴリーの適切性については、看護者を対象とした調査結果が公表された。適切性が低いと考える診断カテゴリーは、「半側空間無視」「精神生活の苦悩」「レイプ-トラウマシンドローム：複合反応」「レイプ-トラウマシンドローム：沈黙反応」「家族コーピング：成長の潜在的状態」など他 5 項目が挙げられている。その理由として、最も多かったのは、「用後の表現の問題（イメージしにくい、何を表現しているのかわからない、言葉・意味が理解できない、聞きなれない、抽象的である、適切な表現方法への修正が必要、第三者に誤解を受ける、日本語で表現できない・訳語の意味がわかりにくい、幅広い解釈ができる）」であった⁴⁾。

これらの意見は、すなわちチーム医療を推進する中で、「看護師の記録が分かりにくい」との他職種からの指摘そのものと重複していると考えて良い。

表 1 NNN (NANDA-NOC-NIC のリンゲージ) 例

看護診断：非効果的呼吸パターン		
【定義】患者が、呼吸パターンの変調に関連して、実在または潜在する適正な換気の喪失をきたしている状態。		
【成果】呼吸状態：気道開通		
主要介入	推奨介入	随意介入
気道管理	エアウェイ挿入固定	アレルギー管理
気道吸引	人工気道管理	アナフィラキシー管理
	誤嚥対策	肺理学療法
	咳嗽強化	救命救急ケア
	ポジショニング	蘇生術
	呼吸モニタリング	
	サーベイランス	
【成果】呼吸の状態：換気		
主要介入	推奨介入	随意介入
気道管理	エアウェイ挿入固定	酸塩基平衡モニタリング
呼吸モニタリング	気道吸引	アレルギー管理
換気補助	不安軽減	肺理学療法
	人工気道管理	咳嗽強化
	誤嚥対策	エネルギー管理
	機械的換気	運動促進
	酸素療法	機械的換気離脱 (ウイーニング)
	ポジショニング	
	筋肉リラクゼーション法	
	VS モニタリング	

文献⁹⁾より

2) 国際看護業務分類 (International Classification of Nursing Practice:ICNP) とは

1989年世界看護師協会 (International Council of Nursing:ICN) 大会で看護用語整理事業が採択された。このことは、看護師が行っている看護実践を適切に表現する言葉が十分でないために人々の健康に対する看護師の貢献を社会に明示できないといった憂慮は世界共通であったということである。看護実践を言語化し標準化することの意義を ICNP コンサルタントの Norma Lang 氏は「それをコントロールすることも、それに対して財源を確保することも、教えることも、研究することも、政策とすることもできない」と述べている⁵⁾。ここから国際的な看護用語統一に向けての活動が始まり、日本でも看護協会が現在進行形で取り組んでいる。

ICNP には世界中の看護ボキャブラリーとして、看護現象 (Nursing Phenomena)、看護行為 (Nursing Action)、看護アウトカムの分類で、看護実践を記述するものである。看護現象には看護者の看護診断 (NANDA の定義とは違い、ここで言われている「看護診断」は診断的臨床判断の総称である) を表現する用語が 8 軸に分類され、1,233 語がリストされている (表 2)。

表 2 ICNP[®] ベータバージョン 看護現象分類の構成

A 軸	「看護実践の焦点」 focus of nursing practice (685 語) 例: 疼痛、体温調節、胃部不快、掻痒感、
B 軸	「判断」 judgement (343 語) 例: 充足した、変調あり、不十分な、減少した
C 軸	「頻度」 frequency (8 語) 例: 連続的、断続的、まれに
D 軸	「持続時間」 duration (2 語) 急性、慢性
E 軸	「位相」 topology (31 語) 例: 右、左、部分的、全体的
F 軸	「身体部位」 body site (134 語) 例: 目、指
G 軸	「見込み」 likelihood (12 語) 例: 危険性、可能性、非常に低い可能性
H 軸	「該当者」 bearer (8 語) 例: 個人、家族、地域

文献¹⁰⁾より一部改変

看護行為は看護介入を表現する用語であり、これも 8 軸に分類され 1,282 語がリストされている (表 3)。使用に際してのルールを表 4 に、その使用実例として看護診断例を表 5、看護介入例を表 6 に示す。

表 3 ICNP[®] ベータバージョン 看護行為分類の構成

A 軸	「行為のタイプ」 action type (170 語) 例: 観察する、教育する、挿入する
B 軸	「行為の標的」 target (552 語) 例: 疼痛、新生児、化学療法、在宅サービス
C 軸	「手段」 means (262 語) 例: 包帯、排尿トレーニング法、退院手続き
D 軸	「時間」 time (22 語) 例: 退院時、術中、周産期
E 軸	「位相」 topology (30 語) 例: 上部、両側、末梢的
F 軸	「位置」 location (90 語) 例: 頭、腕、デイケアセンター、職場
G 軸	「経路」 routes (48 語) 例: 経口、皮下、病室内
H 軸	「ケアの受け手」 beneficiary (8 語) 例: 個人、家族、地域

文献¹⁰⁾より一部改変

表 4 ICNP[®] ベータバージョン 看護診断・看護活動記述のルール

看護診断
1、A 軸「看護実践の焦点」の用語を必ず 1 つ含む
2、B 軸「判断」または G 軸「見込み」の用語を必ず 1 つ含む
3、その他の軸の用語は、看護診断の拡大や明確化を目的として、任意で用いる
4、各軸から選ぶ用語は 1 つ
看護活動
1、A 軸「行為のタイプ」の用語を必ず 1 つ含む
2、その他の軸の用語は、看護活動を拡大・明確化する目的として、任意で用いる
3、各軸から選ぶ用語は一つ

文献¹⁰⁾より一部改変

表 5 ICNP[®] ベータバージョンを使用した看護診断例

選択した軸	選択した用語	看護診断
A 軸: 看護実践の焦点	疼痛	・極度の疼痛
B 軸: 判断	極度の	・極度の慢性疼痛
C 軸: 頻度	持続的	・極度の持続性、足の慢性疼痛
D 軸: 時間	慢性	

文献¹³⁾より一部改変

表 6 ICNP[®] ベータバージョンを使用した看護介入例

選択した軸	選択した用語	看護介入
A 軸：行為のタイプ	緩和する	・疼痛を緩和する ・冷湿布を用いて足部疼痛を緩和する
B 軸：行為の標的	疼痛	
C 軸：手段	足	
F 軸：位置	冷湿布	

文献¹⁰⁾より一部改変

第一草案となったアルファバージョンは、1996年12月に発表され、日本語を含む16ヶ国語に翻訳されている。改定版であるベータバージョンは標準化された用語の組み合わせによる複雑で詳細な表現を可能にしている。ヨーロッパでは欧州連合国間の看護標準語として、この用語を使用して看護問題や実践を表現していくことになる。この用語を使用していくことでデータ蓄積・活用が可能になることは間違いない。

NANDAの看護診断と同様、ICNPも翻訳がベースであり、日本語としてなじみにくかったりする。他職種からは看護師の使用している用語が理解しにくいとの声もあるが、看護診断やICNPの是非を議論する必要はなく、他職種に向けて看護師として自分たちの実践している内容、看護をこのように表現しているのだと理解を促すための努力が必要だと考える。今後は日本語として無理がなく、わかりやすく、適切かつ自然な表現として洗練されていくことを期待する。

3. 呼吸ケアサポートチームにおける用語統一

呼吸ケアに関するチームアプローチであり、施設ごとにその業務内容や構成メンバーには工夫がこらされている。主に人工呼吸療法や酸素療法を実施している患者への診療水準の向上や統一、安全性の保障を主目的として実施されているラウンド活動が主流になっている。

ラウンド時のチェック内容は、セデーションの有無・効果判定、加温加湿器、回路、吸引手技、吸引用具、口腔ケア(実施、方法、手技、用具)ネブライザ、体位変換(時間、角度)、呼吸理学療法(方法)、呼吸音、血液ガス、胸部レントゲン所見、挿管チューブ管理などの情報収集と必要な治療、ケア内容の提供を主治医や担当看護師とディスカッションし、患者に最善の呼吸ケア提供を目指す活動である⁶⁾。当院におけるケアチームの活動内容は①人工呼吸器装着患者および離脱

後患者の呼吸・循環に関する相談②呼吸理学療法に関するアドバイス③人工呼吸器および周辺機器の安全確認、メンテナンス④口腔内環境のチェックと口腔ケアアドバイス⑤呼吸ケア周辺環境チェック⑥人工呼吸器装着患者家族のメンタルケア等である⁷⁾。他施設では認定看護師を中心としたリソースナースを定期的に各病棟へ配置し、臨床教育や技術指導を実施する活動などの報告がある⁸⁾。

チーム活動の基となるのは、臨床からの情報提供、依頼である。その際に使用される用語は、呼吸機能を表す記号や略語をはじめとし、肺理学療法や人工呼吸に関連したものである。これらの用語が、医師、理学療法師、臨床工学技師などそれぞれの専門性の中で議論され、標準化・統一されれば、看護師としてはそれを正しく使用し、記録することが重要である。多くの急性期病院では一般病棟での人工呼吸器使用も珍しくないが、その頻度、経験によって人工呼吸器に関連した用語の習熟度が違う。正確な情報伝達のためには、用語集が不可欠である。

4. 臨床現場での問題点

医療安全の点から懸念していることは、「話し言葉」の乱れである。特に短縮略語などがそのまま市民権を得たかの如く「書き言葉」としてカルテに記載される現状もある。たとえばSPO₂を「サーチ」「SAT」と表記したり、パルスオキシメータから「P」「パルス」○○%と表記したりしている。バックバルブマスクに至っては、蘇生バック、救急蘇生用バック、バックマスク、アンビューバック、アンビューなど様々な呼び名が存在している等々、臨床での話し言葉の整理が必要である。しかしながら言葉は生き物で、進化していく。ましてや医療となれば進化していくのが当然で、使用される言語も新たに生まれるものと消滅するものがあるが当然である。たとえば呼吸音の表現では乾性ラ音、湿性ラ音が今では連続(性ラ)音、断続(性ラ)音と表現するようになって久しい。これが臨床の現場でどのぐらいの時間を経て普及したのか、まず一斉に切り替わることはないはずである。カルテや報告書、論文等の表記は間違いなく、「連続(性ラ)音」「断続(性ラ)音」が使用されるであろうが、現場での会話、口語としては、「dry rale(ドライ・ラーレ)」「moist rale(モイスト・ラーレ)」まだまだ使用されている。「書き言葉」と「話し言葉」

が同一化していくのには、ある程度の期間を要するものだろう。臨床での安全、質向上、質保障の点からは、このタイムラグを極力短く、タイムリーな対応をすることが必要と考える。

ただし臨床現場は、あくまでもオフィシャルで教育的な場である、となれば正しい用語の使用を各々が意識して行っていく風土を作り上げる必要がある。その一助となるのが用語集である。解説を含め、詳細が記された用語集は問題解決の手助けになるはずである。

5. おわりに

医療に携わるすべての職種がそれぞれの専門性を追求している中で、最新の用語や定義を含めた情報提供と理解を深める努力を怠らないことが何よりも重要と考える。チーム医療の推進にはカンファレンスが必要不可欠であるので、それを機会に相互の理解を深める努力と相互に刺激しあうことが、最新の正しい用語を使いこなす一番の早道であると考えられる。

引用文献

- 1) 黒田祐子ほか日本看護診断学会用語検討委員会：看護部門に導入及び導入予定の電子カルテに関する全国実態調査. 看護診断 9：65-70, 2004
- 2) 藤村龍子監訳：看護診断・成果・介入 NANDA-NOC-NIC のリンケージ. 医学書院、2002
- 3) 中木高夫ほか監訳：看護介入分類 (NIC). 原著第 3 版、南江堂、2002
- 4) 山本裕子著：看護診断カテゴリーの適切性の評価、看護情報システム構築のための看護診断の標準化と評価用具のソフト開発、平成 7 年度—平成 8 年度科学研究助成金 (基礎研究 B) 研究成果報告書 .1997, 15-20
- 5) 佐藤重美著：看護実践国際分類 (ICNP)—看護用語の国際標準化. 看護 52：48-51, 2000
- 6) 鶴澤吉宏著：特集：呼吸ケアは誰が担うべきか、本邦における呼吸ケアの現状と課題. 人工呼吸 23: 148-150, 2006
- 7) 宇都宮明美著：呼吸ケアチーム活動の現状と将来. 人工呼吸 23：50-53, 2006
- 8) 田村富美子：一般総合病院での呼吸ケアシステムに於けるナースの教育と呼吸ケアチームの役割. 日本呼吸管理学会誌 16：84, 2006
- 9) 藤村龍子監訳：看護診断・成果・介入～NANDA, NOC, NIC のリンケージ～. 医学書院
- 10) 日本看護協会看護実践国際分類研究プロジェクト訳：ICNP[®] ベータバージョン<日本語版>. インターナショナルナーシングレビュー臨時増刊号 25：日本看護協会出版会、2002
- 11) 松木光子他：看護情報システム構築のための看護診断の標準化と評価用具のソフト開発、平成 7 年度—平成 8 年度科学助成金 (基礎研究 B) 研究成果報告書
- 12) 棚橋泰之著：NANDA-NIC-NOC のリンケージと看護過程の展開. 月刊ナーズマネジャー 7：25-30, 2005
- 13) 松木光子著：ICNP[®] と看護診断. 看護 54：45-48, 2002
- 14) 岡谷恵子著：ICNP[®] ベータバージョン日本語訳完成に当たって. 看護 54：34-39, 2002
- 15) 数馬恵子著：看護を記述する用語その歴史と展望. 看護教育 44：649-660, 2003